

観光まちづくりレポート

茶畑景観や茶文化などの地域資源を活用したまちづくり「茶源郷プロジェクト」を推進

～和束町雇用促進協議会、和束町商工会ほか～

京都府の南の端、相楽郡の東部に位置し、山腹に緑豊かな茶畑が広がる和束町は、鎌倉時代から800年余り続く宇治茶の最大生産地として有名で、現在、煎茶の生産量は京都府下第1位を誇っている。

半径100km圏内に京都・大阪・神戸・名古屋・堺の5つの政令都市があるという地理ながらも、日本の原風景を今に留め、先人が数百年かけて丹精込めて育てた茶畑の風景は、いわば日本の桃源郷ともいえる。

和束町では、平成23年度から始まった「和束町第4次総合計画」で、10年後（平成32年度）の将来像を「ずっと暮らしたい 活力と交流の茶源郷 和束」とし、住民の生活の質を高めるまちづくりを重視して、少子高齢化の進行に伴う定住人口の減少を抑制するとともに、観光・レクリエーションの振興、産業振興や企業連携を積極的に図り、交流人口を増やすまちづくりを進めており、その施策の一翼を担うのが、和束町雇用促進協議会が中心となって進める「茶源郷プロジェクト」である。

I 概要

和束町は京都府の南の端、相楽郡の東部に位置し、山腹に緑豊かな茶畑が広がる宇治茶の最大生産地として有名である。寒暖の差が大きく、そのことが朝霧を生み、「こく」のある茶葉を育んでいる。農地の7割を占める茶畑の風景は、日本の桃源郷ともいえ、「生業なりわいの景観」として京都府景観資産登録第一号（平成20年）や京都府選定文化的景観に指定されている。広大な茶畑の風景は見ている人の気持ちを落ち着かせ、力を与えてくれるといわれている。

和束町の人口は5千人弱でここ数年減少傾向にあり、町外への流出が顕著になっている。また、高齢化率が31.6%と高く、2010年には過疎指定地域に指定されたなかで、「茶」という地域資源を最大限に活用したまちづくりの推進に大きな期待が寄せられている。

II 抱える問題と従来の取り組み

1. 抱える問題

和束町で産出される茶は高品質であるがゆえ、高価格で取引され、農業収入面で安定している。しかし、消費者ニーズの多様化や日本茶のペットボトル飲料化が進むなど、現在は高品質な茶の市場が縮小しているのが実情で、そこに地域の農家の高齢化や後継者不足も加わり、茶産地としての競争力が低下する要因を形成している。

茶は一般的な田畑と異なり、植栽から最初の収穫まで5年以上を必要とするうえに、収穫した茶を加工する設備に数億円単位の費用がかかる。さらに、技能修得には地域のベテラン農家に弟子入りすることが必要で、誰もが簡単に就農できる訳ではない。また、急傾斜地での農作業が多いため、高齢化した茶農家にとっては厳しいこともあり、徐々に耕作放棄地である荒廃茶園が増加している。



京都府景観資産に登録された茶畑景観（左から、原山地区、釜塚地区、撰原地区、白栖・石寺地区）

さらに、高齢者のみならず若者の町外流出も多く、鉄道や病院、スーパーなどがある隣接の木津川市（旧加茂町、旧木津町）に引越し、和束町まで農作業に自家用車で通うという農家もある。和束町では人口の1/3がお茶に関連した産業に従事しているが、農業以外の雇用の場はほとんどない。これもまた人口流出を促す理由のひとつとなっている。

和束町はこれまで茶産業を中心に発展してきた。しかしながら、以上のような状況から、このままでは生き残れないという危機感が生じてきた。そこで、和束町雇用促進協議会*が中心となって「茶源郷プロジェクト ～飲むお茶から「見て」「食して」「体験して」楽しむお茶へ～」と題した、新たな地域活性化プロジェクトを平成19年に開始した。このプロジェクトは、単に「お茶を飲む」だけでなく、茶の用途を多様化させることで新たな雇用を創出して地域を活性化させ、交流人口の増加、さらには定住人口の増加へと繋げていくものである。

*和束町雇用促進協議会は、平成19年に和束町、商工会、JA、有識者、町内グループなどにより設立された任意団体で、様々な町の活性化事業に取り組んでいる。

2. 取組内容

和束町では茶源郷プロジェクトとして以下の4つの事業をこれまで実施してきた。

(1) 「見て」「楽しむ」お茶事業

① グリーンツーリズム商品の開発

平成21年9月より、和束町の農村特性を生か



お茶摘み体験の様子

して「茶団子作り体験」「お茶摘み体験」「ホットプレート製茶体験」など15の体験プログラムを作成。体験プログラムを組み込んだツアーも受け入れており、年間30団体程度の実績がある。

② 農家民泊の推進

平成22年7月に京都府南部では初めて農家民泊モニターツアーを実施し、10月にはボランティアホリデー*を実施した。ボランティアホリデーは好評で、全国から30名程度の申し込みがあった。平成23年4月からは、ワーキングホリデー*として常時受付を始め、9月現在で、40名の申し込みがあり、受け入れ農家は18軒となった。今後も継続して受け入れを行い、茶農家以外にも民泊を拡大し、最終的に受入施設30軒を目標に取り組みを進めている。

*宿泊代・食事代を無料とする代わりに、参加者に無償で労働力を提供してもらう「ギブ&テイク」の仕組みで、和束町では両方とも内容は同じ。

(2) 「食す」お茶事業

① 茶の加工食品化による多角的な販売の実現

かつて起業を目的とした人材セミナーを受講した町内の主婦らが「恋茶グループ」を結成し、遊休公共施設を活用して、和束茶を使用した加工品の開発を始めた。また、和束茶抹茶を使用した「飲むスイーツ」を開発した茶農家もある。なかでも茶殻を再利用した「お茶の佃煮」は、「ふるさと加工食品コンクール」で優秀賞を受賞するなど、人気商品となっている。開発した商品は、和束茶カフェで販売している。

【お茶の佃煮】

和束に昔から伝わる、茶殻に実山椒とちりめんじゃこを加えて柔らかく煮た佃煮。なくなりつつあった和束の伝統の味が復活した。

【和束茶カフェ】

茶源郷プロジェクトの中心施設となるのが「和束町カフェ」である。カフェは遊休施設を活用し、町の情報交流ステーションとして平成20年6月にオープンしたもので、雇用促進協議会ではカフェ

を中心施設とし、「地産地消の直売所」、「和東茶ブランド化」、「地域特産品を使用した加工食品の開発」、「観光ガイドの育成」、「民泊」などに取り組んでいる。

なお現在は、住民有志で設立した「和東町カフェ運営協議会」が運営を行っている。



和東茶カフェ店内とお茶の佃煮

②野菜直売所（朝市）の設置、茶畑オーナー制度の構築

町内で生産され、消費しきれない野菜などを、朝市として和東茶カフェ駐車場で販売し、地産地消を促進している。また、町外住民が茶のオーナーとなり、収穫したお茶が定期的に届けられ、また、茶摘みなどのイベントにも参加できる「茶畑オーナー制度」も進められている。

（3）「和東茶」ブランド事業

①チャレンジショップを活用したアンテナショップの実施

平成 21 年に、観光パートナーシップ協定を結ぶ神戸夙川学院大学と連携して、神戸市中心部に神戸市のチャレンジショップを活用したアンテナ

ショップを開設。和東町の茶や茶加工品の販売および飲食の提供などを行って、「和東茶」のPR活動、販路の拡大を行うとともに、消費者ニーズのリーサーチを実施している。

②「和東茶」ブランドの構築

和東町で生産される茶は「宇治茶」として流通している。しかし、茶価格の低迷、後継者問題などから地元和東町産の茶をブランド化し、茶の収入の安定を図るとともに、地元への愛着を深め、後継者不足を解消しようと、「和東茶」ブランドを構築する事業を進めている。

農家によるNPO法人「有機茶業研究会」では和東茶を「JAPANブランド」として、主要市場をフランスと定め、海外における和東茶ブランドの構築に向けて、市場調査や国際食品見本市への出店などを実施している。そして、リーガロイヤルホテルなど大手ホテルで「和東茶フェア」を毎年開催したり、海外への取引を行う農家が出てきたりという実績も生まれている。

③「和東茶カフェ」の設置と運営

和東茶カフェ店内では、町内における茶や茶加工品の販売の他、主婦グループ「恋茶グループ」による茶の試飲などが提供されている。また、町内で活動する画家など芸術家の作品の展示や販売も行い、和東町の情報拠点の役割を果たしている。

雇用促進協議会では、平成 22 年度よりホームページ「茶源郷・和東」を開設し、和東町の情報を写真や動画で発信するほか、インターネットによる茶や加工品の販売も進めている。

Ⅲ 課題と今後目指す方向性

以上みてきたように和東町では、茶を活用した加工品製造や観光など、様々な取り組みを実施してきた。しかしながら、これらの取り組みはまだ始めて5年足らずであり、今後、取り組みをより強化していく必要がある。

茶産業の生き残り策としては、地域名を冠した「和東茶」としてブランド化を進めることや、茶

産業における市場の変化、農家の高齢化や後継者不足などから、今後は茶生産のみでなく、新たな産業を創出することも求められる。また、少子高齢化と過疎化による人口流出に歯止めをかけるため、住民の地域への愛着を喚起させるなど、定住の促進を進めることも重要である。また、観光を活用した交流人口の拡大も必要である。

和束町の現在の課題を受けて、雇用促進協議会では今後の方向性として、

1. 地域の茶文化を活用した、新たな産業の創出
2. 茶畑景観の維持と、地域資源としての活用
3. 住民と来訪者のふれあい体験による、移住・定住の促進

と考えている。

そして、以下のようなコンセプトとそれに基づく目指すべき将来の姿をイメージしている。

和束町が実施する「観光資源活用トータルプラン」のコンセプトは、

“茶畑景観” “茶文化” “人とのふれあい体験”
を通じての 行ってみたい、茶源郷づくり

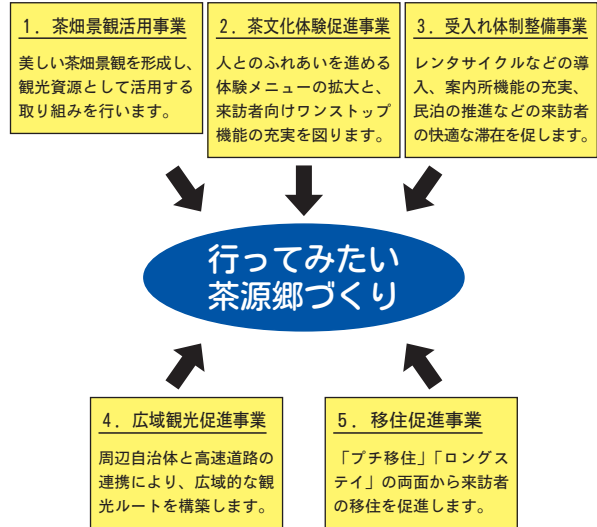
であり、上記のコンセプトに基づき、次の3つの将来の姿を目指している。

1. 美しい茶畑景観を歩き、茶文化に出会えるまち
2. 体験とふれあいを求めて、多くの人々が訪れにぎわうまち
3. 地域を愛する住民が長く住まい、来訪者を暖かい気持ちで迎えるまち

さらに、同プランのコンセプトをもとに、

1. 茶畑景観活用事業、2. 茶文化体験促進事業、
3. 受入れ体制整備事業、4. 広域観光促進事業、
5. 移住促進事業の5つの事業を平成24年度以降に実施する予定である。

事業全体のイメージ



IV おわりに

和束町では、商工会と雇用促進協議会が中心となって、茶源郷プロジェクトを着々と進めてきた。今までみてきたように、少子・高齢化の進展や町の産業構造の特殊性など、和束町を取り巻く環境は厳しく、課題もある。しかしながら、雇用促進協議会では平成24年度以降の中期的なビジョンを作成し、将来の目指す姿をしっかりと確立している。これから先、町の発展に向け5つの事業をどのように進め、町の活性化に繋げていくか、その手腕が問われる。

(丸尾 尚史)

<連絡先>

◆和束町雇用促進協議会

〒619-1212 京都府相楽郡和束町白栖大狭間35
TEL：0774-78-4180

◆和束町商工会

〒619-1212
京都府相楽郡和束町釜塚生水16-1
TEL：0774-78-3321